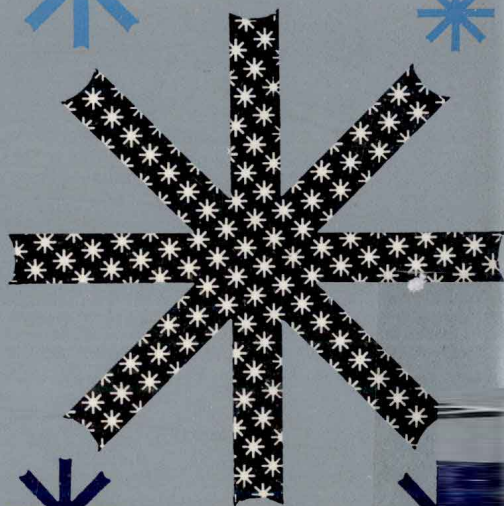


本多勝一



ルポルタージュの方法

本多勝一（ほんだ かついち）

1933年長野県生まれ。現在、新聞記者。

著書『本多勝一 ルポ短篇集』（朝日新聞社）

『旅立ちの記』上・下（講談社）

『カンボジアはどうなっているのか？』（すずさわ書店）

編書『子供たちの復讐』上・下（朝日新聞社）

ルポルタージュの方法

昭和58年11月20日 第1刷発行

定価 400 円

著 者 本 多 勝 一

発 行 者 初 山 有 恒

印刷製本 凸版印刷株式会社

発 行 所 朝 日 新 聞 社

〒104 東京都中央区築地 5-3-2

電話 03(545)0131（代表）

編集＝図書編集室 販売＝出版販売部

振替 東京 0-1730

©本多勝一 1983 Printed in Japan

0195-260809-0042

ミジュの方法

本多勝一

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

朝日新聞社

表紙・扉 伊藤 鑛 治

目次

はじめに——この講座の限界 9

一 ルポルタージュ以前 15

イ 「塩見岳登山記」 16

ロ 『憧憬のヒマラヤ』 28

ハ かけだし新聞記者 38

ニ 『北海道探検記』 47

ホ 『きたぐにの動物たち』 50

ヘ 補遺 53

二 ルポルタージュの四段階 67

1 企画と予備調査 68

2 取材 77

3 構成 86

4 執筆と発表 90

三 外国取材でのコトバの問題について 93

四 『カナダ「エスキモー」の取材 109

A 予備知識の仕込み 109

B 取材方針をたてる 114

C 身回り品のしたく 119

D 現地での交渉 126

E メモと執筆 131

五 『戦場の村』の取材 149

A 社会的状況と時代的背景 149

B なぜベトナムを選んだか 151

C 民衆の日常から解放戦線まで 157

D 構成と執筆 164

E 余談 176

六 『アメリカ合州国』の取材 179

A 合州国を選んだいきさつ 179

B 準備 184

C 取材メモ 188

D 文献 192

E 取材 194

七 『中国の旅』の取材——とくに聞き書きについて 203

A 動機と経過 204

B 政治的立場と報道 208

C 取材の方法 213

D 聞き書きについて 218

E 外国での聞き書き 224

F 『サンダカン……』の場合 227

八 短期決戦型のルポルタージュ 233

A 田中角栄の選挙 236

1 企画 241

2 取材 243

3 構成 250

4 反響 250

B 短篇ルポルタージュについて 253

イ 「山の遭難・調査報告書」 255

ロ 「足和田惨事はこうして起きた」 255

ハ 月着陸と黒人の反応 260

ニ 「霧に包まれた北洋伏魔殿」 261

ホ 「なぜイルカなのか」 266

九 ルポルタージュ記者の条件 269

おわりに 284

解説（上田 敏） 285

ルポルタージュの方法

■凡 例

一、数字の表記は万進法（日本式）とし、千進法（西歐式）を排します。たとえば――

× 五〇三、九八七、一四六円	× 503,987,146円
○ 五、〇三九八、七一四六円	○ 5,0398,7146円
○ 五億〇三九八万七一四六円	○ 5億0398万7146円
× 五億〇、三九八万七、一四六円	× 5億0,398万7,146円

（理由は拙著『貧困なる精神・第1集』へすざわ書店）収録の「数字表記に関する植民地的愚拳」参照。）

二、人名はすべてその人物の属する国の表記法の順序そのまま使います。たとえばイギリス人やフランス人は「名・氏」の順ですが、日本人や中国人やベトナム人は、たとえフランス語やイギリス語の文中であっても「氏・名」の順です。現に中国も韓国もカンボジアもこれを実行しています。（理由は『貧困なる精神・第11集』の「あとがき」参照。）

三、The United States of America は「アメリカ合州国」と訳し、「合衆国」とは書きません。（ただし、「合衆国」が誤りだと主張するわけではありません。理由は拙著単行本『アメリカ合州国』へ朝日新聞社）の「付録3」参照。）

四、ローマ字は日本式（いわゆる訓令式）とし、ヘボン式を排します。（理由は『貧困なる精神・第9集』収録の「ローマ字は日本式でなければならない」参照。）たとえば――

Shi-si, sho-syo, chi-ti, tsu-tu

五、外国語のわかし書き部分をカナ書きにする記号は、ナカテン（・）を排し、二重ハイフン（＝）とします。（理由は拙著『日本語の作文技術』へ朝日新聞社）第四章で述べた使用法とわかし書きとの混用を避けるため）たとえば――

× ホー・チ・ミン、ジョン・F・ケネディ、毛沢東の三人

○ ホー＝チ＝ミン・ジョン＝F＝ケネディ・毛沢東の三人

はじめに——この講座の限界

東京・新宿の「朝日カルチャーセンター」という一種の各種学校で、ルポルタージュの技術的方法についての講座を担当する機会があった。一九七八年の四月から一週一回ずつの三カ月間。以下はこの講義の草稿に一部加筆したものである。

*

この講座に参加された皆さんは、実際にこれからルポルタージュを書くとしておられるか、あるいは現にルポなり記事なりを書いている方、でなければとくにこの分野に関心の深い編集者などがほとんどであります。なぜそのようなに断定的に私がいかと申しますと、実はこの講座を引き受けるに際しまして「朝日カルチャーセンター」事務局をわずらわせて受講希望者からアンケートをとっていただきました。その項目のなかで記入の空間を一番ひろくってあったのは「受講の動機」です。なぜ私の「ルポルタージュの方法」のようなものをきいてみたいと考えたのか。……

希望者数が定員のほぼ三倍になりましたので、残念ながら三分の二ほどの方々にはあきらめてもらわなければなりません。はじめは抽選を考えていましたが、右の「動機」に書かれたさまざまな文章を拝見した結果、これは機械的に決めてしまつてはまずいと考え、次のような方法をとりました。

すなわち、まず一方の極に「いま、切実にルポルタージュを書こうとして（または書いて）おり、その方法の上で技術的にもっと多くを知りたいと思つている人」を置き、反対の極には「一般教養を深める意味で聴講したい人」または「マスコミ関係に就職したい学生」を置きました。そして前者の極に近い方々、その「切実度」の強い方々から優先的に参加していただき、境界付近の「タマムシ色」の少数だけ抽選にした次第です。もちろん「一般教養」や「就職」のための方々を拒否しているのではなくて、できれば全員に加わっていただきたいかったです。教室面積とイスの数という物理的理由で仕方がありませんでした。それに、内容も一般教養的ではなくて、なるべく実践者に役立つための技術を目標とするつもりですから、切実度の強い方が抽選で落ちてしまつてはまずいと思つたのです。

そんなわけですから、皆さんの動機・目的はかなり狭い幅で一致しており、私の話もそれに合わせたものとして、いわば浅く広くよりも狭く深く、またできるだけ体験にもとづいた具体的なものを目指したいと存じます。

趣旨はそういうこととして、それではどういう方法で「狭く深く」論ずることにしたか。一言でいえば、内容の中心を私自身のルポの技術に限定して、過去の体験からいわば「手のうち」を

くわしく紹介するという方法です。なぜかと申しますと、いわばオーソドックスな「ルポルタージュ概論」であれば、むしろ私などよりも優れた適任者がたくさんいる。私は新聞記者ですから、新聞記事を第一の仕事としてきたし、その中のルポルタージュという分野に多くの精力を費やしてきました。したがって、一般の新聞記者が読んでいていどの古典的ルポルタージュは、私もたぶん読んでいるでしょう。けれども、私は決して量的にそれほど多くのルポを読んできたわけではありません。もちろんある分野については部分的にくわしいということはありません。それは自分がやったこと、たとえばエスキモーならエスキモーについて、仕事をはじめから終えるまでのあいだは可能なかぎり文献を読みますから、当然そうなる。しかしたとえば文芸評論家がたくさんの小説をまんべんなく読んでいるような具合には、私はルポルタージュをたくさん読んではいません。したがって概論を語るには不適格者であります。

そんなわけで、この講座では専ら私自身のルポの舞台裏を紹介することになりますが、最初にくりかえして申し上げておきたいのは、これはいうまでもなく「私の場合」にすぎないという点です。そういう限界はハッキリ認識しておいて下さい。ですからたとえばジョン・リードにはジョン・リードの方法があるし、エドガー・スノーにはエドガー・スノーの方法がある。朝日新聞に疋田桂一郎という大記者がいて、私なんかもかけだしのところからその方法や文章を大いに学んできましたが、その疋田さんにも疋田さんの方法があります。それらをそっくりそのままマネすることも、ある時期には良いことだと思います。とはいっても、本当にそっくりマネすることなどたいへん難しく、不可能ですけど、良いところは大いに盗んだらいい。良くないと思

うところは学ばず、要するに批判的に吸収して「自分のルポ」を創りだしてゆけばよいと思うのです。こういうことは小説家の誕生の過程でもよくみられる通りであります。

合州国の有名なジャーナリストで、皆さんもよくご存じのジョン・H・ガンサーは、『ヨーロッパの内幕』だの『アメリカの内幕』だのといったいわゆる「内幕もの」をたくさん書きました。これらは単に時事的出版物にとどまらず、今なお歴史の証言として生きている立派なルポルタージュですが、最後に『ガンサーの内幕』という本で自分自身の手の内を公開しています。「公開」といっても、べつに特に秘密があったわけではなくて、結局は努力と案外平凡な思いつきの積み重ねなのですが、だからこそ私たちも学ぶことのできる技術といえるわけです。なにか凡人には不可能な天才的方法だったら、とても学んだり盗んたりはできないでしょう。

これから私が紹介いたしますのも、どこかの部分で皆さんが私の方法から多少なりと盗んで下さることを期待してお話ということになります。ただガンサーが『ガンサーの内幕』を書いたのは、四半世紀にわたって「内幕もの」を書きつづけた彼が、いわばその功成り名とげたあとの余技として、還暦を過ぎてから書いた一種の回顧録ともいえます。（ですから『ガンサーの内幕』には技術的な部分が案外少なく、出版のあとどんな反響があったとか、どう評価されたとかいった「ルポ以後」のことにかなりのページが費やされており、本当に参考になる技術は最後の章の「内幕ものの内幕」くらいでしょう。）しかし私なんかはまだ試行錯誤をくりかえしながら「どうしたらもっといいルポルタージュが書けるか」に苦闘している未完成のライターの一にすぎませんから、私の方法をひとつのタタキ台として大いにみんなで練り上げていただきたいの

です。

ところで第一回の今日、皆さんにひとつだけ宿題を出しておきます。宿題と申しましても、べつに全員が必ずやれというわけではなくて、少なくともルポルタージュを書こうというつもりの方だったらぜひやってみなさい、というていどのもんです。すなわち、この講義の終わる六月末までに、テーマは何でも自由ですから、四〇〇字の原稿用紙で一〇〇枚以上のルポを書いて提出していただきたい。取材・執筆の期間が三カ月ということですね。一〇〇枚「以上」ですから一〇〇枚でも一万枚でも結構です。

なぜ「一〇〇枚以上」というようなことを条件にするかと申しますと、ルポルタージュというものはその性格上どうしても一定以上量的に書きこむ必要のあることが多いので、まず量的な意味での筆力のない人には大成は望めないからであります。もちろん短くても傑作はありますが、このところは小説の分野での短篇作家とは違うようです。短篇珠玉ルポばかりといったライターは、ちょっと考えにくい。(ただ、新聞の雑報記事は違います。四〇〇字の一枚どころか、わずかに二〇字、三〇字の記事でも大きく扱われることがあります。いわゆる特ダネ的大ニュースになるほどそうです。しかし三〇字のルポルタージュというようなことはほとんどありえないでしょう。)短い文章がいくら得意でも、本格的ルポルタージュが書けるかどうかは全く別問題です。しかし長いルポが書ける人であれば、あとは内容や文章の良し悪しだけが問題であって、少なくとも「書ける」ことは確実であります。

それでは、一人でも多くの方がこの宿題に応じて下さるよう期待しております。

一 ルポルタージュ以前

「ルポルタージュ」を明快に定義することはかなり難しいことです。どこかにはっきり境界を引こうとするとどうも無理がでてくる。少なくともフィクションは除外するけれど、たとえば日記でもルポになりうる場合があります。第二次大戦中レニングラードはナチドイツ軍に九〇〇日間封鎖されて、酷寒と飢餓と砲撃で市民は次々と死んでいききました。『ターニャの日記』は、一二歳のターニャが自分の家族たちの死んでゆく様子を、最後に自分自身も死ぬまでつづった記録です。むろん書いた本人にそのつもりなどなかったけれど、これも一種のルポだといえはいえるかもしれません。

そのように難しい定義など、無理してする必要はないと思うのです。ただ「私自身のルポの舞台裏」ということになると、それでは私自身についてはどこからがルポルタージュといふべきなのか問題になる。一般的には「初めての海外取材」としての『カナダIIエスキモー』あたりが疑問の余地のないルポの始まりのように見られているようですが、それ以前に単行本にな